西欧回りのキリスト教には任せてはおけない

２０２５年1月１０日
西九州伝道所
佐々木正明

神は、罪によって堕落した人類を、二つの部類にお分けになりました。選民のイスラエルと、残された異邦人です。イスラエル民族が、神の救いを全人類へもたらす器として選ばれた一方、残されたすべての異邦人は、イスラエル民族を通して救いに与るようにされたのです。（創世記 12：1～３）　神の救いをもたらすのにふさわしい器とされるために、イスラエル民族には特別に、指導書が与えられました。それが律法です。この律法を通し、イスラエル民族は神について学び、神の前に生きる基本的原則を学び、神の救いの計画を学び、救い主の到来について学び、宗教的にも倫理的にも、救い主の誕生を受け入れるにふさわしい、神の選びの民となるべきでした。その上で、救い主の到来とその働きを記し、完成した救いの祝福を全人類に及ぼす彼らの役割をも記したのが、新約聖書です。さらにこの新約聖書には、イスラエルの不信の罪のために、神の救いの器としての役割が彼らから取り上げられて、霊的イスラエルである教会に与えられたという、重大な経緯が記されています。

イスラエル民族を通して、祝福を与えられるように定められされた異邦人には、この律法は与えられていません。また今のこの論旨の中では、「律法」を少し広義に、「旧約聖書」と理解することも可能です。旧約聖書は、全人類に神の救いの計画を知らせ救いに導き入れるために、神から与えられた指導書です。ただそれは、直接的にはあくまでもイスラエル民族に与えられたものであり、イスラエル民族を中心に据えて記されているために、全民族に適用するためには、かなり慎重な学びと取り扱いが必要です。現在、私たち日本人に伝えられているキリスト教は、この適用をとても乱暴に、また高圧的にやっているために、多くの日本人には受け入れられないだけでなく、理解さえできないものとなっています。

日本に伝えられているキリスト教は、イスラエル民族に与えられたこの律法と、それを土台とした、新約聖書の教えに基づいているものです。新約聖書の教えも、原則的に、この律法を与えられているイスラエル民族、もしくは血縁上はイスラエル民族に属さなくても、すでにユダヤ教に改宗して律法を受け入れていた人たち、あるいは、これから受け入れようという心構えができていた人たちのために、解釈され、教えられ、伝えられたものです。です

からその教えは、律法、すなわち旧約聖書の基本的教えを理解しているという、前提条件を満たしていた上に成り立っています。その前提条件が整っていなければ、とても難解で、受け入れることもできないものとなってしまうのです。

日本にキリスト教を伝えた、西欧人の大部分はイスラエル人ではありませんが、地中海沿岸を中心として発展した、長いキリスト教文化の中で育っていました。そのため彼らは、自分たちが異邦人であるという自覚をあまり持っていません。旧約聖書も新約聖書も、つまり律法全体が、自分たちに与えられたと思い込んでいる節があります。彼らにとってのイスラエル（ユダヤ）民族は、「その血の責任は、自分たちと自分たちの子孫にかかって良い」と言って（マタイ 27：25)、キリストを十字架につけ、自ら進んで呪いを受けた民族であり、自分たちこそ、正しい意味でのイスラエル、霊的イスラエルだという意識が強かったのです。（このような考え方を置換神学と言います。イスラエルと教会を置き換えたからです。）そのような背景と感覚の中で読まれた聖書の教えが、自分たちの生活と文化につごうが良いように理解され、構築されたのが西欧のキリスト教神学です。そこには、律法を与えられなかった異邦人のことについて、考えてみる余地もありませんでした。すなわち、聖書を持たない民族に対する思いやりが乏しく、思索が不足していたのです。白人以外を、人間とさえ認めなかったほとんどの西欧人は、有色人種に対する神のみ心と取り扱いについて、考えて見る必要性を感じなかったのです。

やがて、航海術の発達や通商の発展から、地中海沿岸や北欧以外の世界にも人々の関心が及ぶ時代になり、そこに住む有色人種についても色々と知るようになりました。ところが彼らは、これらの人々を「インド人」と呼び、多くの場合、自分たちと同等の人間であるとは認めたがりませんでした。(インドとは、ヨーロッパと地中海沿岸地域以外の土地の総称で、この意味では日本人もアメリカの先住民もインド人に含まれました。そのために北米の先住民は、アメリカ・インディアンと呼ばれ、中南米の先住民は同じ意味のスペイン語で、インディオと呼ばれています。）しかし数少ない心あるクリスチャンたちは、彼らも神の祝福を受けるべく造られた人間であると認めて、福音を伝えようと宣教を始めたのです。ところが彼らが伝えたのは、残念なことに、あくまでも、「彼らの生活と文化の感覚によって読まれ、彼らの生きる環境に都合よく解釈された聖書の教え」によるキリスト教で、まったく聖書を知らなかった人々、「インド人」に対する教えとして、組み立てられたものではありませんでした。彼らはあくまでも、イスラエル民族に与えられた律法をもって異邦人を、教え、導き、裁こうとしました。しかもそれが、しばしば進んだ文化と兵力と経済力を持っているという自尊と、教えてやるという高飛車な気持ちと、白人という人種的優越感によって行われて来ました。

キリスト教が日本では受け入れられない理由の一つが、ここにあります。本来普遍的であ

るべき福音が、まだ普遍的な神学をきちっと身につけないままで、異邦人である日本人に語られているのです。それでも、自分たちの文化や宗教、政治や経済に力を持っていなかった多くの民族は、進んだ西欧文化と一緒に入ってきたキリスト教を、憧れと怖れをもって受け入れました。中南米諸国やフィリピンなどがその良い例です。ところが、かなり進んだ文化と宗教と強い民族的アイデンティティ、さらにはある程度の政治的基盤と経済力、それに武力を持っていた日本は、キリスト教を受け入れなかったのです。

ところで、異邦人への使徒と呼ばれるパウロが語るところによりますと、異邦人には、イスラエル民族に与えられた律法ではない、「別の律法」が与えられています。（ローマ２：14～15）　そしてイスラエル民族以外の人々は、イスラエル民族に与えられた律法によってではなく、彼らに与えられている「別の律法」によって裁かれるというのです。異邦人が、自分たちに与えられなかった律法によって裁かれるのは、銃を所持しているアメリカ在住のアメリカ人が、日本の法律である「銃刀法」違反で裁かれてはならないくらい、あってはならないことのはずです。ところが、この大切な「異邦人の神学」とでも呼ぶべき論は、聖書の中でもあまり発展させられないままに終わっています。異邦人への使徒と呼ばれていながら、実際の伝道においては、まったくの異邦人に福音を語る機会がほとんどなかったパウロは、当面、福音の普遍性を語る「信仰による救い」の神学を確立するだけで、それ以上の思索を必要とは感じなかったのでしょう。

また、自分たちが異邦人であるという自覚をあまり持たなかった、西欧キリスト教諸国の人々が築き上げてきた神学は、パウロの異邦人の神学にはそのような欠点というか短所、あるいはまだ築き上げられていない部分があるということに、ほとんど気づくことがなかったのでしょう。

使徒パウロや西欧キリスト教諸国のクリスチャンたちとは違って、今もっぱら、まったくの異邦人である日本人へ、福音の伝道に励む私たちは、この、パウロが基礎を据えただけに終わった、「異邦人の神学」を築き上げなければなりません。日本人は、イスラエル民族に与えられた律法とは、別の律法を所有しているのです。ではそれはいったい何なのか、それは異邦人に対してどのような機能を果たすのか。この、イスラエル民族とは別の律法を与えられた異邦人の、創造者に対する責任はどのようなものなのか。さらに、異邦人の救いとこの律法は、どのように関わっているのか。真剣に考えて見なければなりません。異邦人への福音伝道には決定的に大切なこれらの問題が、まったく論じられていないままになっている、西欧回りのキリスト教に任せておいてはならないのです。

そこで、この問題の基本的な事柄について、わずかながらでも、聖書が明らかにしている点を挙げて、そこから議論を進めてみましょう。実は、長いキリスト教の歴史の中には、

当然、聖書以外の「神からの啓示」についての議論も、繰り返されていたのです。ただ、それらの議論の多くは、聖書の記述を土台としたというより、ギリシヤ哲学などの哲学的思考をからめたものが多く、聖書を誤りのない神の言葉と信じる私たちの立場からすると、議論自体にかみ合わないところを感じます。ルターやカルビンといったプロテスタントの聖書主義の立場からの論議になると、もっぱら、イスラエル人に与えられた聖書から、恩寵による救いだとか、神の絶対意思などに議論が集中し、聖書が与えられていない異邦人に関する議論は、ほとんどされて来なかったのが実情です。

1．　公平な神

ところが、霊感を受けて書いた使徒パウロは、イスラエル民族と異邦人との関係を論じ、次のように語っています。「神にはえこひいきなどないからです。律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によって裁かれます。それは律法を聴く者が神の前に正しいのではなく、律法を行う者が正しいと認められるからからです。律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合は、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。」　（ローマ　2：11~15）　ここからいくつかの点が明らかになります。

神がイスラエル民族と異邦人をお分けなったのは、すでに述べたように、あくまでも全人類の救いという目的のためであり、イスラエル民族を特別扱いして、彼らにだけに救いを易しくするためではありません。救いの原則と条件は、イスラエル民族も異邦人も同じです。ただ、イスラエル民族は全人類に救いをもたらすための器として、特別に扱われるということでした。その救いをもたらす器として、イスラエル民族は整えられ、備えられる必要があったからです。神についての極めて原則的な知識をしっかりと蓄え、それを揺るぎがないように保持し、人間の救いの必要を理解し、救い主の誕生について知り、その誕生を待ち望まなければなりませんでした。その準備のために与えられたのが旧約聖書、すなわち律法です。

新約聖書はその旧約聖書の知識を基にして、救い主の到来を見させ、救いの準備の完了を確認させた上、その救いの祝福を体験させ、喜びをもってその救いの福音を全人類に伝えさせるための教導書でした。その中には、神の救いの計画と執行、救いの体験が記され、さらには救いの中身がどのようなものであるかが教えられ、救いの未来と完成が教えられています。そこにはっきりと教えられているのは、イスラエル民族だけの救いではなく、あくまでも全人類の救いであり、全人類のための福音です。ただし新約聖書も、旧約聖書の基盤の上に建てられ、ごくわずかな部分を除いては、イスラエル民族を読者とする前提で書かれて

いることを、知らなければなりません。これを忘れたり、軽視したり、無視したりしたことが、日本人の多くを躓かせる元となっているのです。

2.　すべての人間が持っている律法

パウロはここで、公平な神が「律法を持たない異邦人にもお与えになった律法」について述べています。理論的にこれは、イスラエル民族以外の人々に限って与えられたものではなく、イスラエル民族をも含めた、すべての人類に与えられている律法と考えるべきです。つまり、すべての人間は、イスラエル民族に与えられた律法とは別に、そしてそれより先に、人間にとってもっと本源的な、人間そのものに結びついた、人間の資質としての律法を持っているということです。それは、「自分自身が自分に対する律法なのです」という表現、あるいは、「律法の命じる行いが彼らの心に書かれている」という言い方に、暗示されています。

では、すべての人間が持っていて、自分自身が律法となっている律法とは何のことでしょう。聖書から離れた哲学的な思索は横に置いて、あくまでも聖書の記述を基として考えてみましょう。聖書が人間の本源的姿について明瞭に語っている箇所は、創世記１章 26～27 節の、人間の創造に関わる記述です。それによると、人間は神の姿に似せて特別に造られているのです。誤ってはなりません。人間はあくまでも神に似せて造られたのであり、神と同じに造られたのではありません。神はすべての面において無限ですが、人間はあらゆる点において有限なのです。

もう一つ大切なのは、この心に与えられている律法は、人間の堕落後も消失してはいないことです。罪のために、それは傷つき、曇り、歪み、正しく機能しなくなってしまった部分も多々あると思われますが、完全に破壊され尽くしたのでも、消えて無くなったのでもないのです。宗教改革直後のプロテスタント神学とそれを継承した教えでは、神の絶対意思と贖罪の恵みを強調するために、あたかも、アダムとエバの罪が、神に似せて造られた姿を完全に破壊しつくしたかのように、語られて来ました。しかしパウロによれば、異邦人の中にさえ、それが明確に残っていて、機能しているのです。

神の姿に似せて造られている人間は、根源的に神に似ているということの深い意味は、ここで論じる範囲を超えていますが、幾つか基本的なことを挙げることができます。

a. 霊的な存在として造られた

時間と空間と物質によって拘束されているこの三次元の世界に置かれた被造物の中で、神に似た霊的な性質を与えられているのは人間だけです。なぜそのような特別な取り扱いを受けているのかは、ヘブル書の記者も想像を膨らませる記述をしていますが、(ヘブル２：１６）まったく神のみ心に属することであり、想像の域を出ません。それでも考えられるのは、人間が神との深い交流ができるように設計されたことです。神を感じ、神に聞き、神に語り、神に感謝を捧げ、神を崇め、神を礼拝することができるように造られたのです。聖書によるならば、人間の宗教的本能、何かを礼拝したいという欲求は、正に人間が神によって神に似せて造られている、紛れもない証拠なのです。

異次元の存在である御使いは、まったくの霊的存在として造られました。肉体を持たない彼らは、多くの意味で、人間よりもさらに高い資質と能力を与えられています。ところが神は、どういうわけか、御使いたちよりも人間を大切にされたようです。人間のためには、神は大きな犠牲をはらって贖いを準備してくださいましたが、御使いのためには贖いを準備なさいませんでした。多分人間は、神の愛の対象として造られたからでしょう。御使いたちはあくまでも神に仕えるものとして造られ、人間にも仕えるようにされたと考えられます。

人間が飼う動物にも、使役動物と愛玩動物がありますが、人間は、神にとって愛玩動物のような役割を持ち、御使いは使役動物のような立場に置かれているのでしょう。神は罪ある人間をお救いになりましたが、罪ある御使いを救おうとはなさらなかったのです。

神は人間に、神と同じ性質を与え、神と心を通わせることができるようにされ、これを愛されたのです。だから人間は、本能的に神を感じ、神を考え、見えないものを探り永遠を思うのです。人間の宗教心こそ、人間のもっとも本質的な部分であり、人間である証拠なのです。

聖書は人間の偶像礼拝を厳しく責め、咎めていますが、信仰心、宗教心、神を礼拝しようとする宗教心そのものまでを、罪とは言っていません。むしろそれこそが、神に似せて造られた人間の本源的な姿であり、もっとも大切なものなのです。

本能的に神を感じるというのは、知的に神を理解することとは別です。人間は神について考える前に、神を感じ、神を認識するものとして造られ、そのように機能してきたのです。その感じた神をどう表現し、認識した神をいかに語るかは知的な分野に属するものです。幼子が両親や回りの者を知るのも、たぶん、知的に知るよりも先に感覚的に知るのだと思います。

従来の欧米神学では、神を知的に知るということに興味が集中され、自然啓示あるいは一

般啓示による知識と、聖書啓示による知識という分け方で論じられてきました。しかし聖書そのものの教えによると、自然啓示や聖書啓示によって神を知的に知る前に、神に似せて造られた霊的な本性、霊的感覚をもって、人間は神を知るのだということがわかります。

霊的な感覚を本能として与えられた人間は、霊であられる神だけではなく、他の霊的な存在、例えば御使いや悪魔・悪霊さえも感じることが出来ます。そのために、目に見えないものを恐れ、幽霊や亡霊を始めとする様々な霊的存在までも感じ取り、あるいは仮想して怖がるのです。

b. 高度に知的な存在として造られた

神によって造られた多くの動物には知能が与えられています。しかし人間の知能は、それらをはるかに超えて優れたものであるだけでなく、人間だけに与えられた霊的な能力について思いめぐらせ、考えることができるようにされています。堕落前の人間は、この知能を働かせて、被造物を管理する役割が与えられました。堕落の後には同じくこの能力を正しく用いることによって、自然物を通して、神の目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性を理解すべきだったのです。（ローマ 1：18～25 の記述を、注意深くお読みください）自然啓示とか一般啓示とか呼ばれるものを通しても、人間は神の本性をわきまえ知るべきだったのです。

ところが人間は自分の知的能力に溺れる一方で、神の理解についてはまったくの愚かさをさらけ出し、堕落した人間の限界を露骨に現しました。見えない神の本性、すなわち永遠の神性と力という不滅の神の栄光を、朽ちる人間や鳥や獣などの姿に代え、これを拝むようになってしまったのです。そのために神は、人間を恥ずべき欲望のままにまかせてしまわれました。それが、パウロによると、人間の道徳的敗退に直接つながっているのです。ここに、アダムとエバによる堕落の結果を引き継ぎながら、それとはまた別の「人類の第二の堕落」とも言うべき事実が、語られているのです。

このようにして、最初の罪によって堕落した人類は、悪魔の支配に下り、神を忘れた人間社会を作り上げてしまいました。世代を重ねるごとに、神についての記憶は語り継がれなくなったのは、容易に想像できます。それと共に人間の道徳と知性は廃頽し、神を正しく理解することも不可能になってしまいました。人間には、神に似せて造られた美しいもの、善いもの、そして崇高な精神が備わっています。しかしその一方では、その本来の人間性では、正しい神認識と正しい宗教を持つことはできず、救いの道を知ることもできなくなっているのです。

従って、どれほど立派な宗教があり、どれほど整った教えがあったとしても、それは救いに導くものではなく、もう少し進歩と発達を遂げれば、救いに到達するというものではないのです。救いに至る道は、ただ、神が一方的に備え、一方的に示してくださったものに、すなわち、旧新約聖書という啓示による以外に、知りようがないのです。

c. 愛し合う存在として造られた

神は、唯一のお方でありながら複数の格（神格）を持ち、この格の間で、永遠から永遠まで互に愛し合う愛の神として、存在してこられました。人間は、その永遠の愛であられるお方に「似せて」造られ、愛の性質を持つものとされました。人間は初めから、互いに愛し合い交わりを持つ、社会的存在として造られているのです。

神は人間を愛の対象としてお造りになり、人間との間の交わりを楽しもうとされましたが、それだけではなく、人間同士が互いに愛し合って生きる姿を愛（め）でようとされたのです。律法の中でどの戒めが一番大切なのかと問われたキリストは、第一に神を愛すること、第二に人を愛することであるとお答えになりました。それはまさに、神の創造の目的と人間の存在の意義に関わることであったのです。

すべての人間は、たとえその良心や常識は環境や教育などの外的要因によってねじ曲げられ、互いに矛盾し敵対するものになっていたとしても、その本源的な尊さ、神に似せて造られているという事実のために、尊重し合うところが残っているわけです。人間が人間を大切にするのは、ただ、自分と同じ生物だというだけのことではなく、その中に本源的なもの、神に似せて造られたものを見て、それを愛しているのです。（創世記 9：6）

d. 聖い善良な存在として造られた

神に似せて造られたのですから、人間は当然、聖く正しく善良な存在として造られました。人間は本来的に善いことを好み、正しく生きるようにされていたのです。だから、たとえ罪のために捻じ曲げられ、破壊されて傷ついてしまったとは言え、どのような極悪な人間の中にも麗しく良いものがあり、どれほど破壊的な文化の中にも、正義と公正を求める心が存在するのです。

人間はすべて、先祖であるアダムとエバの罪のために、生まれながらにして罪人であり、神の怒りの対象であるというのは、プロテスタントの福音主義者が強く主張してきたところです。たしかにパウロはそのように語っていますが、聖書は非常に幅が広く、奥行が深い、大きな書物です。表面的には矛盾に思えるような記述がたくさん織り交ぜられています。一

面から読むとそのように読めるのですが、他の面から読むと異なった読み方ができます。それは矛盾ではなく、多様性であり、非常に大きく複雑なものを表現しようとすると、そうならざるを得ないのです。だからこそ、聖書の総合的な読み方が大切なのです。深遠で幅の広い聖書の記述の一部だけを強調すると、アンバランスな教えになってしまいます。

すべての人間が罪人だという、聖書が教える事実は変わりませんが、それだけで人間全体を一括りにしてしまうのは乱暴な間違いです。人間は本源的に善いことを愛し、善いことを見ると感動し、善いことをすることができると幸せを感じるのです。他人に親切にしてあげると、心がほっこりとし、助けてあげることができると、なんとも満たされた気持ちになるのです。性善説という考え方が、哲学的には性悪説と同じように、理屈としては正しいとは証明されていないにもかかわらず、世界全体がなんとなく性善説に立っているのが現実です。

パウロは、律法を与えられていない者が持っている律法について語ったとき、「一緒になってあかしする良心」や、「責め合ったり、弁明し合ったりする思い」についても触れています。(ローマ 2 : 15) パウロの「発展させられていない異邦人の神学」では、まさにただ触れられただけに終わっていますが、これこそ、私たちにとって非常に大切なものです。

パウロがいう「良心」と「思い」は、それぞれの人間の本性に関わっていながら、本生とは別のものと理解されなければなりません。また、文のつながりから判断すると、「良心」と「思い」には大差がないように読み取れます。良心は比較的明瞭ですが、思いは、多分、良識とか社会通念というものに近いのかなと考えます。

そのような前提に立って考えると、律法を与えられていない者が持っている律法とは、神に似せて造られた本源的人間性であり、良心や良識、あるいは常識や社会通念とは、その本源的人間性が環境や教育や育ちという、後天的な要素によって影響されながら作り上げるものだと判断されます。人間の本性は同じであっても、西欧キリスト教の環境で育った者は、西欧キリスト教的な良心をもち、現代ヒューマニズムの強い影響下に生きてきた者は、現代ヒューマニズム的な良識を持ちます。神道的感覚の社会に生まれた人は、神道的な常識を持ち、モスリムの社会に生の営みを続けてきた人は、モスリム的な社会通念を持つのが当たり前なのです。近代個人主義文化の水を飲んできた者は、個人主義を当然の理念とし、全体主義に染まってきた者は全体主義的な思想の中で良心を発揮します。ですから、良心、良識、常識などと呼ばれているものは普遍的ではなく、互いに矛盾し、敵対することも珍しくありまあせん。人間の本性そのものだけが普遍的なのです。

3.　二つの律法の共通性

これらの二つの律法には幾つかの共通性があります。

a. 共に神から与えられた

イスラエルに与えられた律法と、神に似せて造られた人間が普遍的に持つ律法は、共に神から出たものです。従って、この二つの律法に原則的に相反するものはないはずです。ただ、イスラエルに与えられた律法は、神の恵の器となるための教えと訓練を目的とし、かなりの特殊事情を背景にしたものであるために、原則の適応においては、すなわち旧約聖書の記述の大部分においては、ずいぶん特異なものになっています。

非常に優しく、慈しみに富む父親であっても、芸事を教え込む芸人のときは、絶対に妥協を許さず、怠け心を叱りつける鬼のような父親に変わります。少なくても、それが日本人です。目的をもって子供を育てているからです。旧約聖書に記されている神の姿は、まさにこの父親のような姿です。また旧約聖書では、わずかの例外を除いては、おもに国家や民族、あるいはそれらの指導者に焦点を当てているために、個々の人間に焦点を当てて語る場合とは、適用が随分ちがうことに気づきます。国家や民族間の紛争がひとつの大きなテーマとなっていて、何千、何万、あるいは何十万の人々が殺されたなどという、残虐な記述も珍しくありません。それに比べると新約聖書は、個人に光が当てられ、小さな人間の悲しみと喜びが記され、彼らに対する神の細やかな配慮が語られています。

私たち人間に与えられた本源的な愛や優しさから見ると、旧約聖書の多くの記述はあまりにも惨たらしいものです。神に似せて造られた本源的な善い性質も、国家や民族あるいは文化や組織の中で、良識や常識や良心として形成され、それが正当化されて用いられると、惨たらしい殺戮も正当化されることがあるということです。その点、イスラエル民族という全体を取り扱っている中でも、しばしば個人に光を当てている新約聖書では、人間本来の美しい姿が浮き彫りにされているために、読者の心は休まり、慰めを受けるのです。

b. 律法の役目は人を救うことではない

律法の目的は人の生き方を導くものです。人に救いを与えるものでも、救いに至らせるものでもありません。イスラエル人に与えられた律法の目的は、イスラエル人が神の器として相応しい民族になるための指導です。人が創造された時に、神に似た姿として与えられた律法、すなわち全人類に与えられた律法は、人間が人間として人間らしく生きるための、道を示すものです。どちらにも、罪を犯した人間を救う目的は与えられておらず、そのための要素も付与されていないのです。

イスラエル人に与えられた律法は、イスラエル人に対して罪について教え、罪意識を高め、救い主の必要性を理解させる役割はありました。ただしそれは、救い主の贖いがあってこその役割であって、律法自体は何ら救いの力にはなっていないばかりか、イスラエル人の愚かさのために、救い主の必要性を理解させることもできませんでした。

神の姿に似せて造られた人間の本性も、人間の生き方を示すだけで、罪を犯した人間を救い出すことはできません。どれほど優れた生き方をし、どれほど慈愛に満ち、公正を愛し、人々のために自分を投げ打つ人生を送ったとしても、それで救われることはないのです。アダムとイブの罪のために、人間は神から離れ、命を失い、悪魔の支配に陥り、罪に囚われて生きる以外の生き方が、できなくなっているのです。人は新しく生まれ変わらなければ、すなわち、神の国に新しく生まれ出なければ、悪魔の支配から神の支配に移されなければ、救われることはないのです。この働きは律法に与えられたものではなく、贖い主であるキリストと聖霊の働きに任せられているのです。

ｃ．　ふたつの律法は裁きをもたらす

律法は命を与えるものではなく、それに従うことができなかった者たちに、当然の裁きをもたらすものです。神に似せて造られた時に与えられた律法は、全人類に与えられていますので、全人類を裁きます。人間の行為には、常識や良心と言った複雑な後天的要素も加わり、人間が裁くことは不可能です。しかし、神が絶対の正しさと完全な知識とすべてのものの上にある権威をもって、公平に行って下さるものです。その上に、イスラエル人は、旧約の律法に照らし合わされて裁かれます。霊的イスラエルと言われているクリスチャンもまた、聖書の教えに照らし合わされて裁かれることになります。

4.　ふたつの律法の相違点

ふたつの律法には決定的な相違点があります。

a.　与えられた対象が違う

すでに述べたように、人間が神に似せて作られた時に、神に似せて造られたという事実が、そのまま人間の本性となり、生きるための基盤、指針、日本的に言えば「道」、すなわち生きるための定めとなったのですから、これはすべての人類を対象とした普遍的なものです。それに対して旧約聖書に記されている律法は、律法の書自体がはっきりと述べているように、エジプトの地、奴隷の家から助け出され、導き出され、救い出されたイスラエル人が対

象です。（出 20：１～２を正確に読んでください。） その律法の中には、すべての人類に与えられた普遍的律法と共通要素がたくさんあるとは言え、イスラエル人が神の選びの目的のために、整えられていくように与えられた、特殊な律法です。これをそのまま、すべての人間に適用するのはまったくの間違いであることも、すでに語ったとおりです。

b. 与えられた目的が違う

全人類に与えられた心の律法は、人間が人間として生きるための、基本原則として与えられたものです。突き詰めると、神を愛し（むしろ敬い）、人を愛するという原則になります。イスラエル人に与えられた律法も、律法としての側面を突き詰めると、神を愛し（敬い）人を愛するという原則に到達するのは、キリストがお語りになったとおりです。イスラエル人も、全人類に与えられた律法から除外されているのではありません。

とはいえイスラエル人に与えられた律法は、やがて与えられる救いを示すという点において、全人類に与えられた律法とは決定的に異なるユニークなものでした。イスラエル民族に与えられた律法は、狭い意味の律法においてさえ、救い主を予表するものでした。さらに旧約聖書全体としての律法は、儀式や出来事による予表だけに留まらず、預言によっても救い主の到来を語るものでした。

全人類が人間の本能として所持している律法は、救いとは一切関わりがありません。救いについて語ることも、示すこともなく、ただ人間としての生き方を示すものです。一方、イスラエル民族に与えられた律法は、救い主の到来を示すものであり、救いへの道しるべとして与えられたものです。この律法自体は人を救うことはないとしても、救いの準備として与えられているのです。旧約聖書の中に救いの基本が述べられているのです。旧約聖書なくしては、救いについて語る新約聖書が意味を成さなくなるのです。旧約聖書全体はキリストを信じる救いに至るために与えられた、「養育係」なのです。

ただし、全人類共通の律法も、人間に与えられた知性という賜物とあいまって、神の救いについて思いを馳せ、期待させる力とはなりえます。もしも、ヨブという人物が、アブラハムの家系に属さない者であり、アブラハムとほぼ同時代に生きたのだとしたら、彼が救いについて思いを馳せ、救い主の到来に期待を寄せたのは、イスラエル民族に与えられた律法によるものではありません。（ヨブ１９：１５）

私たちが教えられたプロテスタントの神学では、聖書を大切にするあまり、聖書以外の啓示や救いについての理解を、非常に軽視する傾向にありますが、聖書の啓示によらなくても、神を正しく理解し、救いについて思いを巡らせ、救い主に期待することもあり得るという事

実を、認めなければなりません。ヨブ以外にも、セツ、エノク、ノア、メルキゼデク、アビメレクなどの例がそれを示しています。あるいはソロモンを訪ねたシェバの女王や、イエスの誕生を祝福しようと東方から訪ねてきた、占星術師たちもこれに当たるかもしれません。

使徒パウロもまた、「もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです」という言い方で神の配慮について述べ（使徒 17 : 27)、異邦人の神知識の妥当性について語っています。ただし、それらの理解と期待ははなはだ不明瞭であり、不完全であり、直ちに救いに至らせるものでも、直接救いに繋がるものでもないことは、言うまでもありません。同じパウロが、「神はこの世の知恵を愚かなものとされた」と断じて、「この世は自分の知恵によって神を知ることがない」と明確に告げているとおりです。（Ｉコリント 1 : 20〜21）ここでパウロが言う「神を知ることがない」というのは、十字架に絡めての論議であり、神の救いを、あるいは救いの神を知ることはありえないという意味であって、自然啓示では、まったく神を知ることができないというのではありません。

聖書の律法を大切にするあまりに、それを絶対視して、全人類にそのまま適用する一方、全人類に与えられた律法を軽んじこれを無視する傾向が、横暴で乱暴なキリスト教、独善的で他宗教や文化を思いやることができないキリスト教、好戦的で残虐なキリスト教を作り上げてきました。旧約聖書を基礎とする、ユダヤ教的倫理観がそのままキリスト教に流入し、人間本来の愛や優しさ、神に似せて造られた人間の本性にそぐわない、ユダヤ的キリスト教の常識と良心を生み出したのです。暗黒時代のキリスト教は、聖書自体をあまり知らなかったということで横に置くとしても、聖書が知られるようになり始めた頃の、大航海時代のキリスト教、さらに聖書が広く知られるようになってからの植民地主義のキリスト教や、近年まで続いた白人至上主義のキリスト教と奴隷制度のキリスト教、さらに現代資本主義と手を組んだキリスト教などが、神に似せて造られた人間の本性に背く宗教であることは明白です。

ちょっと問題から横道に外れますが、筆者は、１９９０年代のいつだったか、日本福音同盟から選ばれた二人の代表者の一人として、カナダのバンクーバーで開かれた大会に招かれたことがありました。その大会のメインテーマは、グローバル化の中の福音宣教でした。出席者の主だった宣教師や学者たちは、これから来るに違いない大きなグローバル化の波に乗り、大いに福音宣教の力にしようと、意気揚々の発言を繰り返していました。質問の機会が与えられたので、筆者は、それは大航海時代の植民地政策に乗った宣教と同じではないか。そのようなキリスト教を、私たちは求めていないと反論をしたものです。会場は何かおかしな雰囲気になりましたが、その後の自由時間に、多くの開発途上国の代表者たちが、私のもとにきておっしゃいました。「宣教師の財布から、この大会に参加させられている私たちには、決して言うことが出来ないことを言ってくださって、本当にありがとうございま

す。」

全人類に与えられた本源的な律法を大切にし、それに重きを置く考え方は、近代ヒューマニズムとして台頭し、今や、以前はキリスト教国であると自他ともに認めていた、多くの国々をも覆っています。これらの国々で進行している「教会離れ」は、ユダヤ教の律法の感覚から抜け出せないキリスト教に失望し、本来の人間性に帰ろうとする動きであるとも捉えることができます。現代の無宗教の西欧諸国は、かつてのキリスト教西欧諸国よりも、神が与えてくださった心の律法に近いところにあるとさえ言えるのです。

c. もたらす裁きが違う

二種類の律法は、もたらす裁きが異なります。イスラエル民族に与えられた律法は明文化された律法であり、解釈の相違や適用の違いがあるとは言え、かなり明らかでるため、明らかな裁きをもたらしました。その律法を継続している新約聖書の教えも、それに反した者にはかなり明白な裁きが示されています。最終的には、神を信頼するか否かの問題となり、滅びか救いかということになります。

ただし、この滅びにも刑罰の程度があり、救いにもその光栄に差があることは、キリストや使徒たちの言及で明らかです。人は皆、その行いに応じて裁かれるのです。一方、創造された時に人間に与えられた、人間にとって本源的な律法による裁きは、滅びか救いかという問題には関わりません。聖書が言う通り、律法なしに罪を犯したものは、その律法なしに「滅びる」のです。（ローマ２：１２） 救われるのではありません。

ふたつの律法の裁きの違いは、特に、偶像礼拝の罪の裁きに際立っています。人類は、すでに、偶像礼拝の罪のために神の裁きを受け、その行き先は滅びと定まっています。いま私たちが生きている道徳的廃頽と倫理的混乱は、偶像礼拝に対する神の裁きがもたらしたものです。（ローマ１：２４） 私たちは、毎日、神の裁きの中で暮らしているのです。

そのような偶像礼拝の裁きと滅びの中にいる人類から、神はひとつの民族を選び、「私はある」とおおせになる神としてご自分を現し、多くの奇跡をもってその民族を奴隷の状態から救い出し、あたかも人間の婚姻関係に例えられるような、特殊な契約関係に入れてくださいました。イスラエルは契約の民となったのです。その上で、天と地を創造しただけではなく、ご自分に似せて人間を造られた「至高の神」として、自己紹介をしてくださいました。その神の自己紹介の書物が、出エジプト記と創世記です。

神はそのような救いと明瞭な自己紹介の後に、だから、「あなた方は、私以外に何者をも

神としてはならない」とお命じになったのです。（出２０：３） この命令に反するイスラエル人の偶像礼拝の罪は、ローマ書１章で語られている異邦人の偶像礼拝の罪とは、異なったものです。イスラエル人は、はことさら厳しく禁じられ、とても重く罰せられなければなりませんでした。イスラエルは、救い主を迎えるにふさわしい民族となるために、偶像礼拝は撤廃されるべきだったのです。

私たちは、この厳しさが、イスラエル民族だけに適用されるべきものあることを、改めて、はっきりと理解しなければなりません。この律法をもって異邦人を裁いてはならないのです。先に述べたように、日本の銃刀法でアメリカに住む人を裁いてはならないのです。その上、異邦人はすでに裁かれているのです。今、彼らに必要なのは偶像礼拝からの救いであって、偶像礼拝の裁きではありません。イスラエル人が、偶像礼拝の中から、神の恵みによって救い出されたように、異邦人たちも今、恵みによって救われるべきなのです。

5. ふたつの律法の理解が、異邦人である日本人の宣教に及ぼす影響

ふたつの律法の理解は、当然、旧約聖書の律法を与えられていない、異邦人である日本人の伝道に直接関わってきます。そのいくつかを簡単に取り扱ってみましょう。

a. 人間の本源的性質を大切にしたアプローチ

人間の罪を強調した神学とそこから発する伝道では、当然人間の醜さを探り出しては晒し出す方法が採られていました。罪を指摘し、キリストの十字架の贖いを示し、悔い改めに導くという、私たちの間でごく普通に見られるやり方です。これは一見聖書的のように見えますが、既に述べたとおり、ユダヤ人神学を文化に取り込んでいる人たちに対する福音の伝え方であって、神に似せて造られていることを前提とすべき、異邦人の取り扱いにはふさわしくありません。

日本人は他人を傷つけないという美徳を大切にしますので、たとえ、「あなたは罪人です」という高飛車な言葉をかけられても、めったに露骨な言い争いにはなりませんが、静かな敵意と嫌悪感を作り上げ、福音に硬く耳を閉ざす、残念な結果をもたらす場合が多くなります。日本人も多くの民族と同じように、基本的には性善説に立った社会を築いていますので。それに真っ向から戦いを挑む、「あなたは罪人です」というようなアプローチは賢くありません。

むしろ私たちは、人間性の美しさ、優しさ、善良さを積極的に認め、その人間こそが神に似せて造られているという聖書の教えを積極的に語り、そこから、優しく恵みに富む神につ

いて説いて行くべきです。また、私たちには理屈なしに神を感じる感覚を与えられています。これも、霊である神に似せて造られた人間の、霊的性質と能力によるものであり、啓蒙主義や合理主義、あるいは自然科学や物理の及ぶ範疇にはないものです。私たち西欧のプロテスタント神学に影響されたクリスチャンは、ついつい、神を理屈で説明しようとして失敗します。西欧神学の中の神論などは、もともと、無限の神をこの小さな人間の頭脳と言語で説明しようとする、人間の高慢の愚かさそのものなのです。神は存在しないと言ってはばからない日本人も、人間の宗教心を大切にします。心の奥深くでは、大きく深く高く広く、限りない恵と優しさに満ちた存在を感じているのです。その存在こそ、聖書が天地の創造者として紹介しているお方であり、「私はある」とおっしゃるお方なのです。私たちは、「この世が自分の知恵によって神を知ることがない」というパウロの断言を正しいと認めます。しかし、人間は、神を感じることができるのです。パウロの断言を余りにも広範囲に適用し、神を感じる人間本来の霊性を否定してしまわないようにしましょう。

b.　宗教を悪いものと見ないアプローチ

多くの日本人を躓かせているクリスチャンの態度、あるいは伝道のアプローチに、他宗教に対する軽蔑、侮蔑、嫌悪感、批判あるいは中傷があります。真面目なクリスチャンたちは、徹底して偶像礼拝をお嫌いになる神への忠誠心として、それをやっているのかもしれませんが、クリスチャンが、あるいはキリスト教が嫌われる最大の理由の一つが、ここにあります。宗教を否定し、神の存在を信じない日本人の多くも、信仰心そのものは大切にし、宗教を尊んでいるのです。

この信仰心を大切にし、宗教を尊ぶ日本人の気持ちは、神に似せて造られた人間の本性の現れであって、決して卑しめられるべきものではありません。どのような信仰であれ、いかなる礼拝形式であろうとも、神に似せて霊的に造られた人間の、神を礼拝しようという本能の現れであり、神に感謝し、神を畏れる心の表現である限り、それを大切にしてあげなければなりません。イスラエル民族に与えられた律法をもって、異邦人を評価してはならないのです。異邦人の評価は異邦人に与えられた律法によってなされるべきです。

もちろん、救い主はナザレのイエスとして現れたキリストのみにあり、ほかのどのような信仰にも宗教にも、救いはありません。またすべての宗教には間違いがあり、多くの宗教は人間の無知に付け入って、悪行を重ねています。それらのことは正しく判断されなければなりませんが、すべての宗教を蛇蝎のごとくに嫌い、悪しざまに言うのは間違いです。

聖書も、イスラエル人が他の宗教を奉じることを禁止していますが、異邦人がそれぞれの宗教を持っていることに関しては、揶揄していることはあっても、それ自体を悪しざまに言

っていないのです。使徒パウロも異邦人の街の偶像の中を旅行しても、その宗教的退廃に心を痛め、怒りを覚えたとしても、宗教そのものを攻撃することはせずに穏やかに取り扱い、真の神に対する理解の糸口として用いています。日本人は、パウロの時代のアテネの人々よりも、よほど優れた神意識を持っています。その信仰心、宗教心、宗教行事や習慣を手蔓として、天地の創造者であるお方を、示してあげることが肝心です。

c.　自分たちの宗教の欠点や汚点を素直に認めるアプローチ

私たちの神は完全なお方です。聖書は誤りのない神の言葉です。だからといって、私たちの語ることに間違いがないわけではなく、キリスト教の教えが完全であるわけでもありません。間違いのない聖書の教えを間違って理解していたり、その誤りが混ぜ込まれていたりして、キリスト教という宗教が作り上げられたのは、疑いようのない事実だからです。

従って私たちは、自分たちの見解や意見を述べるときには、常に謙遜でなければなりません。たとえ聖書の教えそのものであっても、それはあくまでも私たちが、「絶対に誤りがない」と信じているだけのことであり、客観的に、「誤りがない」と認められ、それが普遍的に認識されているわけではないからです。聖書が誤りのない神の言葉であると信じている私たちの間では通用する話でも、聖書の権威を認めていない一般の人たちには意味のないことになるのです。それを、預言者気取りになって頭ごなしに語っても、あまり聞き入れられることはありません。

キリスト教の歴史を見ても、クリスチャンたちは信仰によって正しいと思える行為をしたとしても、客観的には間違いだったことがたくさんあります。自分たちの間違いを素直に認め、キリスト教の歴史の汚点を隠蔽せずにお話することが、逆に、語る福音に信頼する心を起こさせることでしょう。

私たちに出来ることは、聖書の教えを単純に語り、私たちはこれが神の教えであると信じていることを伝え、その信仰に立った暮らしをすることによって、たくさんの素晴らしい経験をしたという事実を語るのです。聖書の教えを他の宗教や哲学などと比較することも、時には良いでしょう。そのような必要が生じることもあります。そのようなときでも、自分の主観的信仰や体験を、客観的なものとして語るのは、クリスチャンではない人たち、特に、普通の日本人のように聖書の権威を認めていない人には、あまり益のあることではありません。あくまでも、理論上は主観的信仰に基づく体験であり経験です。それを聞く多くの人は、客観性がないとして退けるかもしれません。ただ、かなりの数の人は、それに心を開き、自分も同じような体験をしてみたいと望むのです。

私たちが自分の信仰の体験を語り、キリストを証し、福音を語るとき、聖霊が働いて下さり、聞く者の心に語りかけてくださるのです。多くの場合、聖霊がお働きになるのは人間の理性を超えた部分、情緒とか感情と言われる部分であり、理屈を超えたところで「ストンと腑に落ちる」かのように、話を聞き入れられるようにしてくださるのです。信仰とは理屈による情報の収集や合意あるいは同意ではなく、むしろ、霊であられる神のみ姿に似せて造られた人間が、神の働きに応答する霊の行為なのです。

d. 律法や旧約聖書よりも、心の律法に重点を置くアプローチ

私たちは聖書主義のプロテスタント信仰を持つものとして、どうしても、ユダヤ人に宛てた律法とその上に建てられた新約聖書の、罪と悔い改めと十字架の赦しを福音として語ってしまいます。確かにそれは福音の真髄です。でもそれは、律法を与えられた者に対してわかり易く説かれたものであって、日本人のような異邦人、文字で書かれた律法を与えられていない人びとには、非常に難解なものです。文字によらない「心の律法」を与えられている異邦人には、この心の律法を通して福音の真髄に運ぶほうがわかりやすいはずです。

まず、心に感じている気高いお方について語ることが、効果的だと思います。日本人に限らず、すべての人間は神に似せて造られたものとして、神を感じる感覚を持っています。どれほど神の存在を否定しても、本能的に神を感じるために、心では神の存在を否定できないでいます。特に日本人の多くは、非常に気高い神意識を持っています。神という言葉を使うと、八百万の神々や通俗的な神々を想定してしまい、「そんなものいない」と言いがちですが、心の中には、多くの意味で聖書が教える天地の創造者に近い、大きく、気高く、情け深く、恵みに富むお方を感じ、密かに感謝の思いと畏れを抱いて崇めているのです。その真面目な神感覚に触れ、それを引き出し、それに気付かせて上げることが大切です。パウロもまた、神意識としては日本人より相当劣るアテネの人々に向かい、同じようなアプローチをしています。神道的な日本人の神感覚を、間違っても「偶像礼拝の罪」などと言ってけなしてはなりません。

人の心に残る優しさ、正義を愛する性質、公平を求める思い、互いに愛し合い助け合う姿が、神に似せて造られた人間の本性を現していることを語りましょう。それこそ、聖書が与えられる前に、すべての人間に神がお与えになった普遍的律法、心の律法であることをお話しましょう。そしてその律法が、あらゆるところから見て、日本人の中にこそ最も色濃く残っていることを認めてあげましょう。心の律法に忠実に従っているという点から言うと、日本人は、聖書を持っている「キリスト教諸国」の人々より、ずっと高い倫理観を持っているのです。

多くの日本人が、「唯一絶対の神を信じるキリスト教を精神的土台とする国家は、異なったものを認めない残忍な性格を持つが、多くの神々の存在を前提とする日本の文化は、多様性と包容力を持ち寛容を旨とする」という趣旨のことを語っていますが、留意しておくべきことです。ただしこれは、唯一の神を信じるか、多くの神々の存在を前提とするかの問題よりも、聖書というイスラエル人に向けて書かれた律法を、誤って自分たちに与えられたと理解して、その上に立つ文化と、聖書を知らずにいながら、同じ神が与えてくださった心の律法によって生きる文化の違いだと考えるべきです。日本人の優しさ、倫理観の高さは、神から出たものであると説明してあげましょう。

f.　日本人の心にあるおぼろげな感謝の対象を明らかにするアプローチ

昔から日本人は、目に見えない大きく優しくめぐみ深いお方を感じて、感謝を捧げてきました。「ありがとうございます」「すみません」「いただきます」「ごちそうさま」というような、何気ない挨拶や表現にもそれが現れています。「ありがとう」はあり得ないことですという意味ですが、「私のような者に、このような素晴らしいことがおこるなど、ありえないことです」という気持ちの表現で、本来、目に見えない存在に対して言う言葉です。「すみません」というのも、謝罪の言葉のように聞こえますが、もともとの意味は、「自分のような者がこのように生かされている、恵みに与っていることは、誠に済まないことです」という、目に見えないお方に対するへりくだりと感謝の表現です。「いただきます」も「ごちそうさま」も、料理を作ってくださった方や、材料を提供してくださった人たちに言うだけでなく、その背後で、食物を育て無料で提供してくさっている、目に見えないお方に対するお礼の言葉なのです。

日本人はむかしから、自分たちが目に見えない大きく優しいお方に育まれて生きてきたと、実感しています。この目に見えないお方が誰であるかはよくわかりません。わからないながら、わからないままに、多くの場合は偶像などを作ることもせずに、目に見えないお方と認識したまま、崇めてきました。日本人の多くは、国粋主義者の感覚とは別に、日本は神の国だと感じているのです。

g.　不十分な感謝を改めて、あるべき感謝を教えるアプローチ

日本人は目に見えないお方に向かって、そのお方が誰であるかは良くわからないまま、折に触れて感謝を表現してきました。さまざまな祭り行事にもそれが現れています。しかし、感謝の対象がよくわからないお方であるために、感謝の方法もまた曖昧な上、感謝の深さも十分ではありません。どうしてもなおざりにされ、おざなりに済まされてしまいがちでした。

美しい自然に恵まれ、食べ物も豊かに与えられ、日々生きてくることができたことに対するお礼が、きちっとされて来たとは思えません。あまりにも大きな恵みに対して、私たちは不義理を重ねてきたのではないかと思います。育ててくださった親に不義理を重ねる子供は、親不孝者と言われますが、私たちは、私たちを恵み育んでおられるお方に不義理を重ね、親不孝ならぬ「神不孝」を続けているのではないでしょうか。聖書ではこの神に対する不義理、神不孝を、「罪」と呼んでいるのです。

自分を造り、必要なものを整え、生かし、恵んでくださっているお方を感じながら、それに見合った感謝の心、喜びの気持ちを十分に表現してこなかったことが、人間の最も大きな罪なのです。自然の美しさ、その素晴らしさに感動するだけでは足りません。それを造り、与えてくださったお方に感謝しましょう。それだけでなく、その素晴らしさを感じる心をお与えくださったことにも感謝しましょう。美味しいたべものを与えてくださったことにも、もっとはっきり感謝を捧げましょう。美味しいと感じる感覚が与えられていることにも感謝しましょう。感謝と賛美と礼拝を習慣づけて行うように、励ましてあげましょう。

h. 神の倫理を明瞭に教えるアプローチ

日本人は非常に高い倫理性を持っています。この倫理性に訴えるのが良いと思われます。その日本人の高い倫理は、天地を造り、人間を造られた神に由来することを話してあげましょう。人間は神によって、神に似せて造られ、本来、聖く、正しく、公平を愛し、哀れみ高く評価し、自己犠牲の精神に溢れているものです。多くの民族がこの人間本来の姿を甚だしく損なっているのは、彼らが見えない神の永遠の栄光を、低次元の偶像に代えて拝みこれに仕えてしまったためであると、聖書をもって説明し、日本人が、クリスチャン文化に育った人々よりも、多くの場合、よほど高い倫理性を維持してきたのは、古来から目に見えない方を目に見えないまま崇め、偶像礼拝をしなかったからであり、それが目に見えない天地創造の神から祝福を受けているためだと、説明してあげましょう。（ローマ書１：１８～２１）そして、敬神愛人（普通聖書では、神を愛し人を愛すると翻訳されていますが、今の日本語の愛という言葉を、神に対して用いるのは、あまりふさわしくなく感じます。）という聖書の原則的倫理を、教えてあげましょう。

i. 罪と悔い改めを正しく教えるアプローチ

旧約聖書の律法は日本人に与えられたものではないのですから、聖書をもって日本人を罪人扱いにするのはやめましょう。聖書は確かにすべての人間が罪を犯していると教えていますが、ユダヤ人に与えられた聖書をもって、日本人を罪人と断じてはならないのです。むしろ、日本人に納得できるように罪を教え、日本人にもわかり易く悔い改めを教えるべき

です。日本人の罪は日本人の倫理観から語るべきです。

日本人は、心の最も深いところで、天地の創造者であるお方を感じてきました。ところが八百万の神々の物語などの俗信や、無神論的考え方に影響され、自分の心で感じてきた真面目な宗教意識を、あて隠して、内側に閉じ込めてきてしまいました。そのため、当然しなければならない礼拝もしてきませんでした。お祭りをしたり、神社を建てて拝んだりはしましたが、その礼拝はとても充分と言えるほどのものではありません。日本人はまさに、親よりも尊い天地創造の神に対して、「神不幸」を続け、その口では言い表せない大きな恵に対して、不義理を重ねてきたのです。

この「神不孝」、あるいは「不義理」こそ、人間が神に対して犯している最も重大な罪なのです。このような罪の理解は、本来、正しい聖書の理解によって生まれるはずなのですが、イスラエル人に向けて語られている聖書を、自分たちに語られていると考えて読む読み方からは生まれてきません。

j.　神の赦しを正しく教える伝道

私たちは一直線にキリストの十字架による赦し、十字架に対する信仰を語りがちですが、これは旧約聖書を与えられたイスラエル人にはわかりやすいことであっても、あるいは長いキリスト教の歴史背景を持つ人々には、違和感のないものであっても、旧約聖書を知らない異邦人である日本人には、大変理解困難な教えでまったく馴染まないものです。教える方も初めから理解させるのは困難だと感じていますから、伝道そのものができないままで終わってしまいます。

確かにキリストの十字架なしに、救いはありません。神の贖いのみ業がなければ赦しはありえないのです。とは言え、救われる側の人間が、救われるために、神の贖いの業を知る必要はないはずです。ましてや贖いの奥義を理解するなどという、おこがましいことができるはずがありません。ところがプロテスタントの福音派の神学では、伝道のためには絶対に十字架の物語を語らなければならず、救いに導くためには神の贖いの犠牲の話を理解させなければならないのです。これは「ねばならない」であり、「MUST」です。

信仰の父アブラハムは、キリストのことを知りませんでした。当然、十字架も贖いも悔い改めも知りませんでした。しかし彼は、神を信頼することによって救われたのです。彼は、彼自身がまったく知らないキリストの贖いのみ業によって、その贖いのみ業が行われる二千年も前に救われたのです。

アブラハムが信仰によって義とされたという、福音の普遍性について議論したとき、パウロはキリストを信じる信仰と言う主題を、突然、何の予告も説明もなしに、神を信じる信仰に変えてしまいました。それで良かったのです。私たちが救われるのは、私たちが十字架の福音を信じるからではありません。ましてや、私たちが贖いの奥義を理解して受け入れるからではありません。私たちのために、キリストを十字架につけ、贖いのみ業を完遂してくださった神様を信頼するから、その信頼の故に、神様が私たちを救ってくださるのです。神の救いは、私たちの知識に基づきません。キリストの十字架の物語を聞いて、受け入れることに基づきません。私たちの救いは、キリストの十字架の事実により、その事実を打ち立ててくださった愛によるのです。

k.　赦しを獲得させる伝道

私たちは、神の赦しと受け入れを徹底して教えるべきです。私たちがキリストについて何一つ知らなくても、天地をお造りになった神に感謝し、崇め、礼拝し、信頼して行くならば、天地をお造りになった神は、キリストの贖いのゆえに、私たちを赦し、受け入れることができるのです。

神に対する感謝を強調しましょう。見えない神を見えないままに崇めることの大切さを教えましょう。このお方を崇め、礼拝し、この方の大きな愛と力に信頼して生きることを教えましょう。救われるためには、あるいは義とされるためには、さらに、神の子とされるためには、その上、神の国に入るためにはそれで充分です。まず、神の国に入ること、神の子となること、聖霊の力を体験すべきことを教えましょう。神に信頼するならば、神の力、聖霊の助けによって、神のみ心に沿った生き方ができるようになるのです。何はさておいても、まず、それを実際に体験してもらいましょう。

とは言え、それはクリスチャン信仰の入口に過ぎません。神の子になってもらってから、神の子としての知識を身につけてもらわなければなりません。まず、神の救いの恵を味わい、神の国の力を体験し、聖霊の交わりを実感してもらってから、天地の創造者がどれほど大きな愛で、私たちを愛してくださっているかを話して上げれば良いのです。私たちのために、御子キリストをも惜しまずに、十字架につけてくださったのです。

結び

神様は人類に二種類の律法を与えてくださいました。一つはイスラエル人に対して与えられたものです。そこには、天地の創造から人間の創造、人間の罪とその結果の人間をはじめとする被造物の呪い、人間をお救いになる神の計画とその計画の遂行が、さらには人間を

含めた被造物の完全な回復が語られています。そしてその中に、人間と神とのあるべき関係、キリストの贖いと信仰による救い、普遍的な福音とその宣教、キリストの贖いが可能にした聖霊の内住とキリストのみ体など、たくさんの大きな主題が語られています。この律法がなくては、人間は救いに対してまったく無知であり無力です。

もうひとつの律法は文字で書かれたものではなく、人間の心に記された律法です。これは人間が神の姿に似せて造られたという事実に基づきます。人間は神の性質を頂き、神に似た感覚を持ち、神に似た行動をします。それが人間の本性、あるいは本能として、万民に与えられているのです。この本性に従うならば、人間はたとえ聖書を知らなくても、かなり、神のみ心に近い生き方ができるのです。

異邦人である日本人は、この心の律法だけで生きてきました。この律法になじみ、この律法に親しみを持っています。ですから、天地創造の神について正しく理解してもらい、正しい礼拝を知ってもらうためには、日本人が持っているこの心の律法に訴えるのが得策なのです。

ただし、万民に与えられた律法は、人間の生き方の基本を教えるものではあっても、人間に救いを教え、救いに入る方法を教えるものではないことを、確認しておかなければなりません。救いの道は聖書による以外に知りようがなく、救いはキリストの贖いのみ業による以外はないのです。